

史跡斎宮跡 第153次調査現地説明会資料



柳原区画で最大級の掘立柱建物(東から)

平成20年2月9日(土)

斎宮歴史博物館

1 はじめに

史跡斎宮跡では昭和45年度に発掘調査を開始して以来、これまでの調査で史跡の東部で平安時代の都市計画ともいえる碁盤目状の地割(「方格地割」と呼んでいます)がみつかっています。この地割は幅約12mほどの区画道路をはさんで、一辺約120mの方形の区画を重ねたもので、方形の区画が東西で七列、南北で四列みつかっています。この「方格地割」は京都の長岡京や平安京とよく似ていますが、一般の庶民までが住む「まち」ではなく、斎王の住む宮殿である「内院」と、斎宮の官庁街(「官衙」ともいいます)であったと考えられています。中でも現在は竹神社の境内地となっている区画(「牛葉東区画」と呼んでいます)と、その東側の区画(「鍛冶山西区画」と呼んでいます)は、区画内を大規模な掘立柱塀が大型の建物を厳かに囲む「内院」に相当する区画であることが発掘調査で確かめられています。

今回の第153次調査を実施した「柳原区画」は、内院とみられている牛葉東区画のすぐ北側にあたります。昨年の7月から12月に実施した第152次調査では、一般の建物より格が高いとされる2棟の四面庇付建物と1棟の三面庇付建物が見つかり、この区画が斎宮跡の中でも高級官庁街といえるような場所だったのではないかと考えられるようになりました。また、昭和53年度に実施した第20次調査でも北と南の二面の庇をもつ大型の掘立柱建物がみつかっています。第153次調査では、この大型建物の未確認の部分を明らかにして、柳原区画の性格をさらに解明することを目的に実施しました。

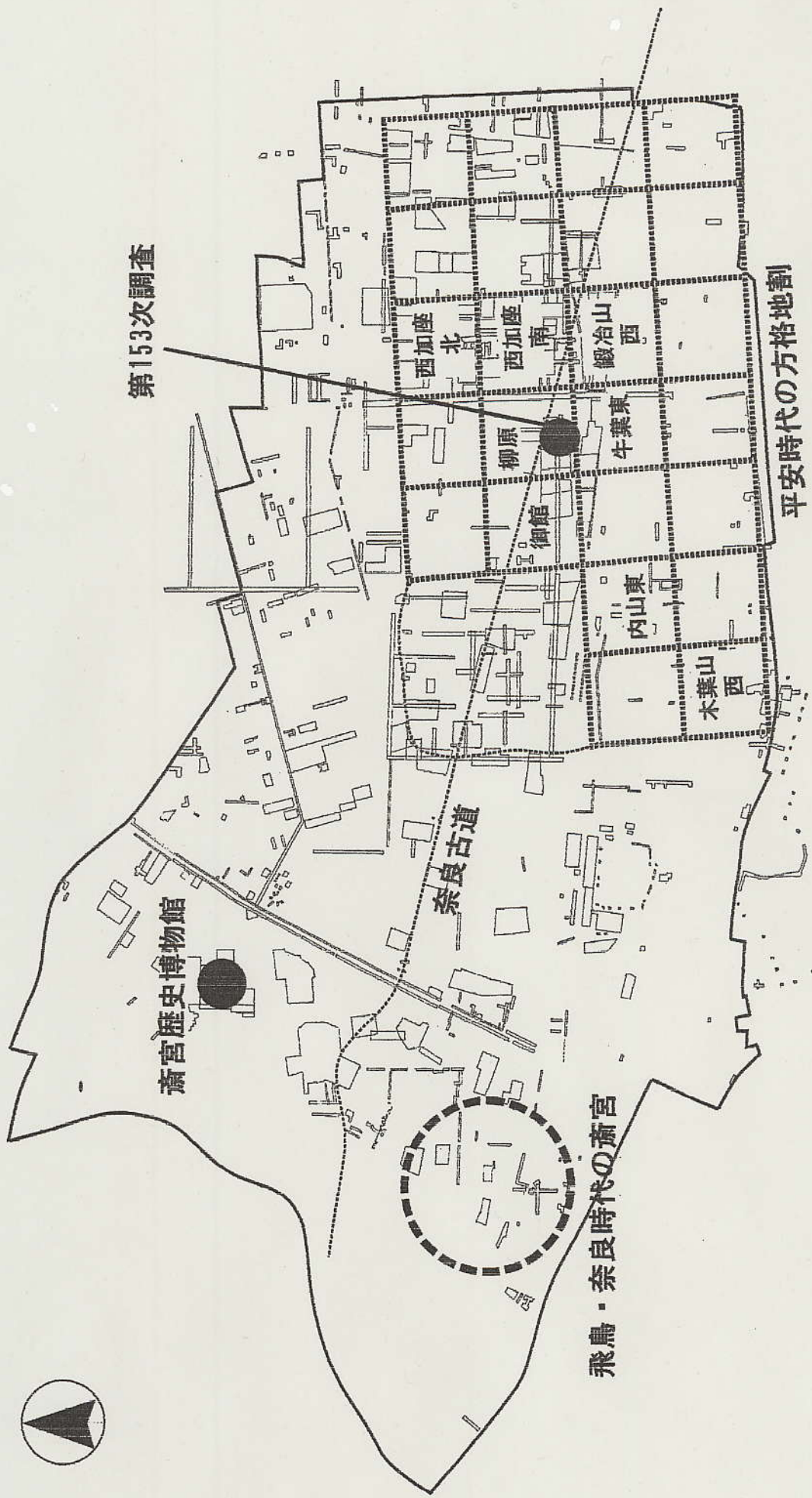
2 見つかった遺構

発掘調査で見つかるもののうち、建物の跡や溝など地面に直接残されたものを「遺構」といいます。第153次調査では、飛鳥時代～奈良時代(7世紀末～8世紀)から鎌倉時代(13世紀頃)までの遺構が見つかりましたが、奈良時代末～平安時代(8世紀末～12世紀)の遺構が最もたくさん見つかりました。

(奈良時代の古道)

今回の調査で見つかった最も古い時代の遺構は、調査区の北端で見つかった通称「奈良古道」と呼ばれる古代の官道の南側溝です。幅約9mあるこの道路は、斎宮歴史博物館の南から史跡の東端を超え、3km以上の長さにならって直線的に延びていたことが史跡内外の発掘調査で確認されています。これは古代の大和と伊勢を結ぶ国家的な幹線道路だったと考えられます。

今回の調査区で見つかった側溝は、後世の削平や発掘調査で上部が取り除かれたと考えても非常に残り浅く、第153次調査の東の第143次調査区、西の第20次調査区で見られる溝の深さと比べても浅いものでした。また、2本の溝が



第153次調査

斎宮歴史博物館

奈良古道

飛鳥・奈良時代の斎宮

平安時代の方格地割

食い違いで重なっているようにもみられます。この北側溝を確認した第152次調査でも、今回の反対側の側溝がこの部分だけ浅くなっていることを確認していますので、あるいは道路工事の際の施工区間の境目であったのかもしれませんが。

なお、「奈良古道」は奈良時代末の方格地割の造営により、これに寸断されたかたちになってしまいます。

（平安時代の掘立柱建物）

方格地割が造られたのちの遺構は、まず調査区のほぼ全域で平安時代の掘立柱建物が見られます。現段階では調査区の東端の遺構の確認を進めている最中であり、すべての建物の検討がすんではいませんが、見つかった柱穴は多く、これまでに10棟近くの建物を確認しました。建物の時期は平安時代の前期（9世紀頃）から後期（10世紀後半～11世紀頃）のものまでありました。

今回の調査で最も注目されるのは、調査区の北部で見つかったSB1080（ ）です。この建物はその大部分が今回の調査区の西隣の第20次調査で発掘されており、北と南の二面に庇が付く大型の建物であることが知られてきました。この庇付建物というのは建物の中央の身舎^{もや}の外側に取り付く庇が付く建物で、古代の建物でいう庇は身舎のみの建物より広い空間を必要とする場合につけられ、中世から現代の建物のように縁側につくようなものではありません。こうした庇付建物は一般に身舎のみの建物より格が高いものとされることが多いようです。

今回の調査は、このSB1080の全体像を明らかにすることを目的のひとつにあげていましたが、予想以上の成果があげられました。それを整理しますと、

- ・ SB1080の建築は、方格地割の造成当初より少し時代の下った平安時代前期（9世紀頃）とみられること。
- ・ SB1080は同じ場所に継続して、少なくとも3回以上建てなおされた建物であったこと。
- ・ 最も古い段階のものは、南北だけでなく、5間×2間の身舎の東側にも庇をもつ三面庇付きの建物だったこと。
- ・ 2回目の建て直し以降は、5間×2間の庇を持たない建物に変わったと見られること。

なお、SB1080の身舎部分の柱穴は度重なる掘削のためか穴の輪郭が不明瞭なため、実際の柱の大きさなどはよく分かっていませんが、庇部分の柱穴には直径20cm前後の柱の痕跡が残っています。三面庇をもつ時期の建物の規模は東西約15.2m、南北約11.0mほどになり、これまでに分かっている斎宮跡の役所建物の中では最大級となります。

SB1080以外にも現段階で10棟近くの掘立柱建物が見つっています。先のSB1080の南方へ10～15mの範囲に柱穴が集中しており、このあた

第153次調査 遺構略図

第152次

奈良古道

第143次

SB9011

SB9012

SB0263

第8-9次

SB0260

SD9044

井戸

溝6

土坑15

土坑9

溝1

掘立1

土坑25

掘立2

SK0323

掘立3

土坑20

土坑14

土坑12

SD0324

SB1080

SB1084

第20次

0 10m

(遺構検出中)

りでは何度も建替えが行われたことが分かります。ほとんど他の建物との重複が少ないSB1080とは対照的です。いずれも直径30cm前後の円形の柱穴が多く、掘立1～3のように南北方向に長い建物が目立ちます。平安時代後期～末期(11～12世紀)のものと考えられます。

(区画内の溝)

調査区の東西方向の中ほどで見つかった南北溝SD9044は、第143次調査でもその延長が確認されており、長さ28m以上になることが分かりました。この溝は柳原区画の東西のほぼ中央に位置するため、一辺約120m四方の区画を細分する区画溝の性格をもつのではないかと考えられます。埋土などから平安時代前期(9世紀)頃のものではないかと考えられ、この時期の遺構が周辺にみられないことから区画溝としての性格がうかがわれます。

平安時代末から鎌倉時代はじめ頃の土器が出土した溝1とSD0324も排水の役割もあったと思われますが、何らかの地割のための区画溝と考えられます。

(調査区内の土坑^{どこう})

土坑(大きな穴)は全般的に調査区の南部に分布する傾向があります。建物を繰り返し建て直すような場所には小型の土坑(土坑25など)がみられるだけです。第153次調査区の5mほど南には、方格地割の東西道路が通っていたことがこれまでの発掘調査で分かっていますが、道路の近くには建物が建てられなかったことも土坑が南に偏っている理由と考えられます。調査区南端の土坑15からは平安時代初期(8世紀末～9世紀初)頃の比較的古い土器が出土していますが他の土坑は平安時代前期の終わりから後期にかけてのものがほとんどです。

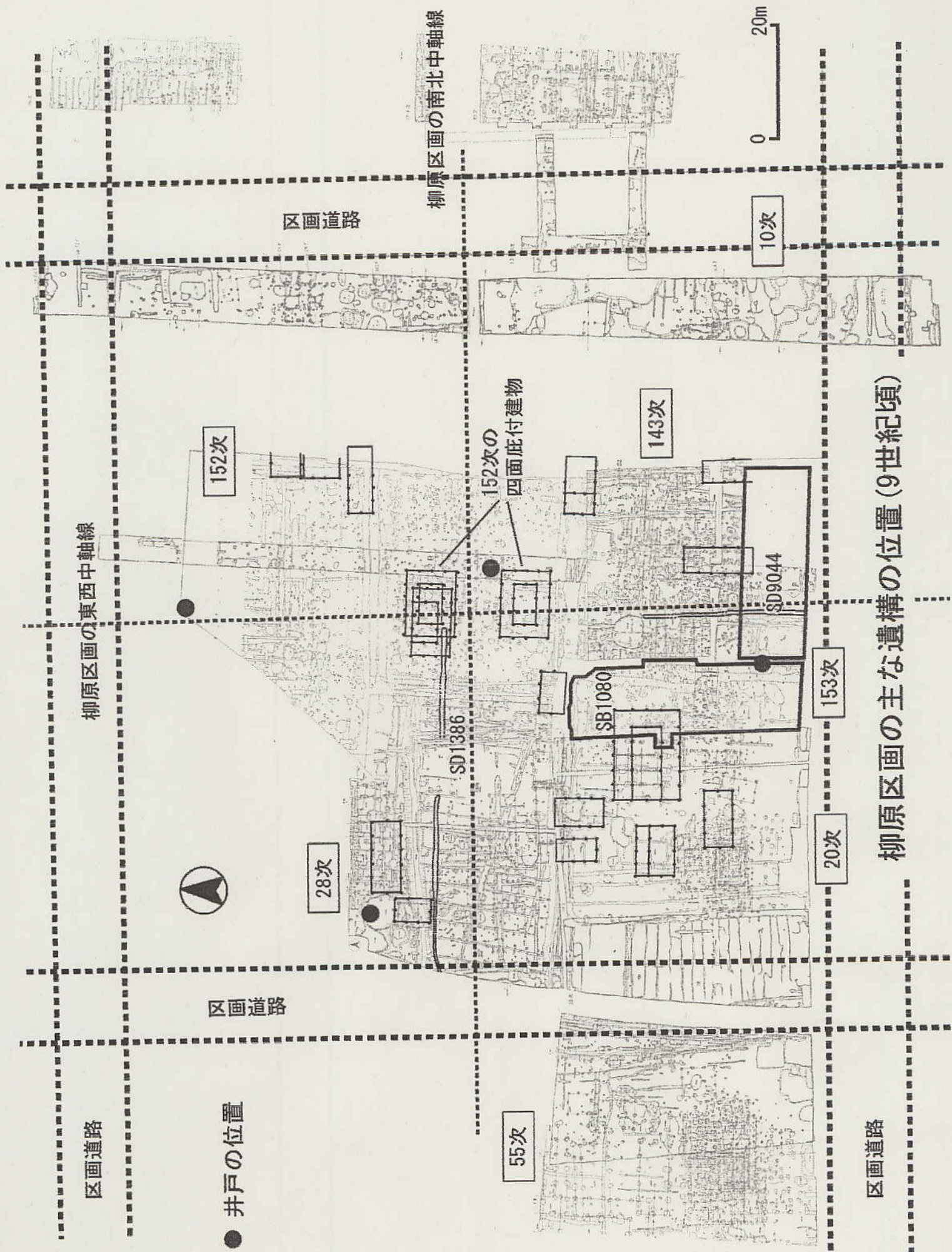
(その他の遺構)

調査区の南部で井戸がひとつ見つかっています。直径が3m程度と、斎宮跡では中型のもので、石組みなどは伴っていません。現在底まで調査していませんので、掘られた時期は明らかではありませんが、上部の埋土から平安時代前期の土器片が出土しています。

3 出土した遺物^{いぶつ}

発掘調査で見つかるもののうち、土器のように人が持ち歩けるものを「遺物」といいます。

第153次調査で出土した遺物は、まだ整理の途中ですが整理箱で約70箱ほどの量があります。周辺の調査でいくつか見つかった、大量の土器を棄てたような土坑は、今回の調査区の中にはありませんでしたので、一度の発掘調査での出土量としては多い方ではありません。すぐ北側で実施した第152次調査でも調査面積の割には出土遺物が少なかったことから、柳原区画の中ではあまり土



器などの廃棄がおこなわれなかったのかもしれませんが。

一方、比較的出土した量の目立つものに^{りよくゆうとうき}緑釉陶器や中国からの^{ゆにゆうとうじき}輸入陶磁器があります。緑釉陶器は、北側の第152次調査ではあまり見つからなかったのですが、第153次調査では、愛知県の^{さなげようしぐん}猿投窯址群で焼かれた9世紀代の緑釉陶器を中心に40片近く出土しています。また、輸入陶磁器には、一般の集落の遺跡などではほとんど出土しない、11世紀頃の白磁の破片がいくつか見つかっています。これらのいわば高級品といえるものが第153次調査で調査面積と比較してもたくさん出土している点は注目されます。

4 今回の発掘のまとめ

第153次調査では、昨年実施した第152次調査にひきつづき、柳原区画の解明するうえで大きな成果をあげることができました。

まず、斎宮の官庁街のエリアの中でも最大級の規模をもつSB1080の全体像が判明しました。最大で三面庇の構造を持っています。第152次調査で見ついている3棟の三・四面庇付き建物とあわせてみると、過去の方格地割内部で見ついている7棟のうち4棟が柳原区画で発見されたことになり、この区画には他の区画に突出して多面の庇付き建物が多いということが明らかになりました。柳原区画が斎宮の官庁街でも際立った一画であったと考えられます。

また、今回の調査区では南北方向の区画溝SD9044が見つっていますが、第28次・152次調査の東西溝SD1386とあわせると、おおむね柳原区画の南西4分の1を占める区画が想定されます。大型建物SB1080がそのほぼ中央に位置することも興味深い事実です。

鎌倉時代に及ぶ溝1・SD0324を確認したことも、まだまだ進んでいないこの時期の斎宮の実態解明のためのデータを得られたといえるでしょう。

斎宮歴史博物館では、来年度も引き続き柳原区画の調査を進め、この区画の性格と遺構の変遷を追求していきたいと考えています。みなさまのご理解とご支援を重ねてお願いいたします。

斎宮跡の発掘調査で見つかった遺構は1万個近くあるため、これらを区別し整理するため、遺構の種類の略記号と通し番号をつけています。遺構の略号には主に次のようなものがあります。

SB 掘立柱建物 SD 溝 SE 井戸 SH 竪穴住居
SK 土坑（大きな穴）